

あるインド青年



マドラス南方、マハーバリプラムのヒンドゥ教遺跡

駒井義明

私たち見学団がマドラス南方五、六十キロの有名なヒンドゥ教遺跡のマハーバリプラムの二日間にわたる見学を終って、バスでマドラス市街に入ったのは、一九七一年二月二十四日の午前一〇時半頃であった。マドラスは英国時代の最大根拠地の一つであり、市街は殷賑をきわめ、インドの他の都市の場合と同様に人の多いのに驚かされた。われわれ見学団の一行は日本への土産の線香を買うために雑踏と汚穢のバザール街を二〇分ほど歩いて、やっとただ一軒らしい線香屋を見付けた。なお、バザールとは、イランに発祥し中近東、インドなどで一般に行われている同業商店の集合区域であることは先刻御承知の通り

である。しかし、マドラスでは結局、線香屋は一軒しかなかった。

インドの線香は東南アジアのものと同じく日本のそれとはちがひ、竹の芯に線香を固め塗りつけたもので、その強烈な香はまことにすさまじいものがある。また、線香とは別であるが一般にインドおよび東南アジアでは食欲を刺激するためか、食事に芳香のつよい香辛料を用い、バンコク辺りのタイ料理の食べづらいことは経験された方も多いと思う。

さて、マドラスでのショッピングに時間をついやしたわれわれは、正午すぎ、マドラス空港に到着したがここもまた人間の雑踏であった。私は空港ロビーの空間を見付けて、一息していると、私の肩を叩くものがある。それとともに、流暢な日本語が聞こえてきた。ビックリした私が振りむくとそこには二〇才すぎと思われる品の良い一人のインド青年が立っていた。その青年が語るところによると、自分は二ヶ年ほど日本語を習っているが、いつか日本に行きたいというのである。そこで、私とその日本語の先生の名を尋ねると、その人はクマガイという名の技術者らしく、マドラスで日本語学校を開いているが、そこ

で自分は日本語を習ったのだという。そして、自分の名をシュリニヴァサンと名のつた。私は自分が習った日本語を何とかして実際に用いようとするその青年のいじらしさに心を惹かれるものがあつたが、まもなく飛行機の出発する時刻となつたので、手紙の交換を約束してカルカッタ行き機の機上の人となつた。

インドへ行った人はだれでもはじめはその雑踏、汚穢そして貧困に驚かされるが、帰る時には何か愛着を覚えるというが、私もその通りで、ことにこのインド青年の姿はつよく私の脳裏に残つた。

このインド青年ばかりでなく、インドの人は何か日本人に対して愛着心あるいは尊敬心をもっているように感じられる。たとえばマドラスからカルカッタへついて泊つたホテルのボーイの場合でもそうであつた。私が部屋付のボーイに若干のルビーを心付けとして与えたが、彼はさほどよごれていない私の靴をぜひただで磨かしてくれといつてきかなかつた。そしてその眼差しには非常な親しみを感じられた。

また、パトナからベナレスのホテルについて午睡している時に、突然ホテルのボーイを

案内として室を訪ねてきたインド紳士があつたが、この人は京都大学農学部某氏の知人らしく、しきりに私にその人を知らないかとなづねていた。

その他、時あたかもバキスタン戦争の最中であつたが、飛行場での検査でもそうきびしくは感じられなかつた。これらは二、三の例にすぎないが、インド人の親日感情が強いことはたしかなようである。そこで、われわれ日本人としてもその信頼感にこたえなければならなかつとつよく感じたわけである。

インドから帰つたのち、その青年と数回手紙のやりとりをしたが、その中でその青年は平仮名と英語の対訳の和英辞書が欲しいと書いてきた。しかし、インドから帰つてのち、私の勤務の大学ではまもなく後期試験、入学試験そして新学期の諸行事と続いたので、この青年の希望に応じる余裕がなかつた。

しかし、八月の初め、京都の街を散歩していた私はその青年の希望に近い字書を発見して大いによこび早速これを送つた。しかし、返事がなかなか来ないので、私はその字書が果して無事にインドについたかと危惧の感じを抱いていたが、二、三日前に非常な喜

びをこめた返書が届いた。それによると、彼の先生の技術者は、この数ヶ月新しい工場の建設で忙しく、日本語の授業はやっていないこと、そこで彼はマドラスの書店で買ひ求めた日本語の絵本で自習していること、またマドラス在住の四人の日本人と、日本語だけで会話していること、また漢字の練習もして現在二百五十字余り知っていること、その他、来年の末までには全ての当用漢字を習いたいこと、などが記されていた。

私は、私がしたこのような些細なことも、日本を信頼しているインドの人人の心の支えになればよいと念じているが、果してどうであらうか。

さて、最近東南アジア方面を旅行する日本人は非常に多いが、彼らはいたずらにわが国の経済力を鼓舞して現地人のひんしゆくをかう人が多いというが、まことに遺憾なことである。そして、経済面だけでなく他の面でもわれわれ日本人が褒められたいと願うのは、私一人ではないであらう。

(昭和四十七年九月)
(元高校教諭、現京都外国語大学教授・歴史学)